

汗とハンカチ

ピアニストがステージに登場してピアノの前に座る。そして持ってきたハンカチをフワリと置く。ピアノの金属フレームの左手前には、製造番号が書かれた窪みがあるのですが、なぜかそこはピアニストのハンカチ置き場のスペースになっています。

舞台に出る時に、私はいつも必ずハンカチを携えます。いつからハンカチを持っていくようになったのか、ふと気になりました。始まりは子供の頃のピアノ教室の発表会だったと思います。舞台で一人ずつ演奏するのですが、お辞儀をして座る前、まずはピアノの前に立って、左手で鍵盤の手前を軽く押さえながら右手に持ったハンカチで高音部から低音部まで鍵盤を丁寧に拭いていました。皆がそうするので私も真似をして、前に弾いた友達の汗や汚れを取っ

て、心も清めて、そんな気分になつていたのでしょ。実際、子供はわずかな数の曲しか弾かないわけですから、全員がわざわざ鍵盤を拭く必要などなかったのに。リサイタルやコンチェルトとなれば演奏時間は長く、密度も濃くなります。客席からは運動量の方が目につくようです。腕や指の激しい運動のために汗をかくのは？と思うらしく「コンサートの後はマラソンを走った後のような疲労があるのではないですか」「1回のコンサートで3キロぐらい体重が減ってしまうのではないですか」と聞かれたりします。

コンサートは精神的にはタフな時間ですが、私は演奏しながら運動的な疲れを感じることは、ほとんどありません。額からタラツと流れる汗は一度もかいたことはありませんし、汗だくになることなどおそくありません。しかし、人間はひとりひとり体質が違うので、演奏が始まってほどなく第1楽章が終わるとハンカチを取り出して、流れ出る汗を拭いている方もいます。コンチェルトの時にはピアノの鍵盤に、振り向きざまの指揮者の汗粒が飛んできたこともありました。でも私は、これらの汗も運動から出る汗ではなく、精神的な熱量が造る汗だと思っています。

近年は照明がLED光となりましたので、舞台上がむしろ涼しいほどです。だから、汗のために私がハンカチを使うことなど、もはや無いのですが、今も舞台には必ずハンカチを持って出ます。

そして、そのコンサートで使われなかったハンカチは、演奏が終わってもそのままポツンと取り残され。帰り際に毎回のよう調律師さんがハンカチを届けてくれます。今や私は、忘れものをするためにハンカチを持って行っているようです。それでも私にとって舞台とハンカチはワンセット。ずっと舞台にハンカチを持って行くでしょう。

©Hideki Otsuka

小山実稚恵 — 141 — ピアノと私

公演情報

東京交響楽団
ニューイヤーコンサート2026
ユベール・スターン(指揮)、東京交響楽団
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番
1月10日(土) 14:00 サントリーホール
問い合わせ: TOKYO SYMPHONY チケットセンター
☎044-520-1511
1月11日(日) 14:00 所沢ミューズ
問い合わせ: ミューズチケットカウンター
☎04-2998-7777
1月12日(月) 14:00 横浜みなとみらいホール
問い合わせ: 神奈川芸術協会 ☎045-453-5080

KOYAMA MICHIE 東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」(2006～17年)や「ベートーヴェン、そして…」(19～21年)は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホール・シリーズ「Concerto (以心伝心)」を開催。来シーズンはソロ・リサイタルのシリーズを予定している。ショパン、チャイコフスキーの二大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「こどもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。